

# 目次

第一章 執筆の動機.....	2
第二章 執筆の方法と過程.....	3
第一節 構造.....	3
第二節 プロット.....	3
第三節 筋書きを立てて執筆を開始.....	4
第四節 使用した技術.....	4
1-1. 同義語と類義語.....	4
1-2. 漸層法.....	4
1-3. 信頼できない語り手.....	4
第三章 作品の分析.....	6
第一節 「イスカリオテのユダ」の構造.....	6
第二節 世界観設定.....	6
第三節 登場人物.....	6
3-1. ユージン・S・リプリー.....	6
3-2. デール・F・リプリー.....	6
3-3. ヘンリー・クレイ.....	6
3-4. イーサン・リプリー&シャーロット・リプリー.....	6
第四節 各章の要約.....	7
4-1. 第一章.....	7
4-2. 第二章.....	7
4-3. 最終章.....	7
第五節 結末の意味.....	8

## 第一章 執筆の動機

2024年の夏、筆者はいくつか異なるテーマの映画を見た。その中で最も興味深く感じたのは、ピクサーのアニメ映画「ウォーリー」(2008)である。「ウォーリー」は、終末世界にたった一人取り残されたロボットが、偶然にも地球再生の兆しを発見したことで、長い間宇宙をさまよっていた人類を間接的に救う物語である。劇中では、地球は生命を育む力を失い、もはや住める環境ではなくなったため、人類に見捨てられてしまった。人類は、ロボットが操作し、あらゆるサービスを提供する巨大な宇宙豪華客船に乗り込み、星々の間を旅することになった。人類が宇宙を航行して700年の間、地球が再び生命を育める環境になったかどうかを調査するため、毎年特別なロボットが派遣された。それが劇中のヒロインであるイヴだ。しかし、700年間、イヴは毎回何の成果も得られずに戻っていた。そんな中、彼女は地球にただ一人取り残され、作業を続ける主人公ウォーリーと出会う。ウォーリーの仕事は、人類が地球を去った後に残されたゴミを清掃することであった。彼はゴミの中から面白いものを見つけて収集するのが好きで、ある日、ゴミの山の中から一株の緑の植物を発見した。興味を抱いたウォーリーは、その植物を持ち帰った。しばらくして、地球の調査にやって来たイヴと出会い、二人は友達になった。ウォーリーはイヴに自分のコレクションを見せ、その中にはあの緑の植物も含まれていた。生命の兆しを探知したイヴは、システムに従い、その植物を宇宙の豪華客船へ持ち帰った。これにより、人類は地球再生の可能性を発見し、ついに宇宙を離れ、地球への帰還を決意した。彼らは長らく続いた宇宙船での享楽の日々を終え、地球再生のプロジェクトを始めるのであった。「ウォーリー」は子供向けのアニメ映画であり、一見すると子供たちに地球環境を大切にする重要性を教える物語のように思える。しかし、もし「ウォーリー」の物語を分解してみると、その背後の構造が実は『創世記』に登場するアダムとエバの物語<sup>1</sup>と同じであることが分かる。アダムとエバの物語では、二人はもともと何の不自由もなく、楽園であるエデンの園で幸せに暮らしていた。そこには労働はなく、ただ享楽の日々が続いていた。しかし、悪魔の化身である蛇がエバをそそのかし、善悪の知識の禁断の果実を食べさせたことで、神は怒り、二人をエデンの園から追放した。それ以来、二人は人間世界で労働を強いられ、彼らの子孫、すなわち人類もまた、終わりのない労苦の運命を背負うこととなった。この二つの物語を比較すると、人類が乗っている宇宙豪華客船はエデンの園に相当する。船の上ではあらゆるサービスがロボットによって提供され、人類はただ享楽し、労働する必要がない。一方で、荒廃した地球は人間世界であり、人類は宇宙を離れ地球に戻ったことで、もはや安楽な生活を送ることはできず、地球を再生するために労働しなければならない。また、植物は禁断の果実に相当し、それを通じて人類は地球が再生可能であるという「知識」を得た。そして、主人公ウォーリーは(少なくとも物語の構造上)エバに禁断の果実を食べさせた蛇の役割を担っている。彼は植物をイヴに渡し、それを通じて人類を地球へと導いたのである。もちろん、両者の物語には違いがあり、伝えようとするテーマや価値観も異なるが、その根本的な構造は共通している。こうした考えから、筆者は聖書の物語の構造を用いて小説を書いてみるというアイデアを思いついた。

---

<sup>1</sup> 旧約聖書『創世記』2-3

## 第二章 執筆の方法と過程

『F国回想録』（以下、本作と略す）の制作は大きく三つの段階に分かれる。第一は適切な構造を探ること、第二は物語のプロットを考えること、第三は筋書きを作成し執筆を開始することである。文章の流れを明確にするため、筆者はこれら三つの過程をそれぞれ説明していく。

### 第一節 構造

筆者はインターネット上で『旧約聖書』および『新約聖書』のさまざまな物語を調べ、収集するとともに、身近なキリスト教徒の友人にも話を聞き、最終的にいくつかの物語を候補に挙げた。その中には、『旧約聖書』の「ダビデとゴリアテ」や「バベルの塔」が含まれていたが、最終的に『新約聖書』の「イスカリオテのユダ」を採用することに決めた。

筆者はインターネットの情報や友人の口述を通じて、それぞれの物語の大まかな内容を把握した。しかし、このような寓話的な物語には共通の問題がある。それは、書籍や口伝、インターネットのフォーラムなど、どの形式で伝えられたものであれ、個人的な解釈で聖書本文にはない、もしくは聖書に暗示はあるものの明確な証拠がない要素が付加されることが少なくない点である。こうした状況を避けるため、筆者は「日本聖書協会」のウェブサイトにある「聖書本文検索」機能を利用し、これらの物語に関する該当章や節を検索し、インターネット上の情報に本文と一致しない派生内容が含まれていないかを検証した。

聖書本文の裏付けを得た後、筆者は物語の構造分析に着手した。そして、上記三つの物語を分析して比較した結果、最終的に「イスカリオテのユダ」を本作の構造として採用することを決めた。その理由の一つとして、筆者は「イスカリオテのユダ」が他の二つと比べて広く知られている点を重視した。どの物語を選んだとしても、最終的にはその構造のみが本作に残ることになるが、それでも筆者は本作が聖書の物語と同様に、一定の寓話的な意味を持つことを望んでいた。また、この聖書の物語の本作における表現が、読者の想像の幅や聖書との関連性を決定し、ひいては本作の寓話的な意味の強弱に間接的な影響を与えると考えていた。さらに、他の二つと比較して「イスカリオテのユダ」の裏切りの要素は小説の題材として適しており、より多くの発展の可能性を秘めていると判断したため、本作の構造として選ぶことにした。

### 第二節 プロット

筆者は113年度前学期に東海大学外国語文学科で開講された「アメリカ文学」の授業において、戯曲『Richelieu』<sup>2</sup>を読んだ。『Richelieu』の中で最も広く知られているのは、作者のリットンが創り出した英語の格言「The pen is mightier than the sword」（筆は剣よりも強し）である。この格言は筆者にとって、物語の構想を練る上で大きなインスピレーションとなった。「イスカリオテのユダ」における裏切りの要素と組み合わせ、「文字の力によって何かを裏切る」という概念が本作の核となった。

本作は冷戦期のアメリカとソ連がエルサルバドルで行った代理戦争を基に、架空世界

---

<sup>2</sup> Edward Bulwer-Lytton. “Richelieu” (1839)

の架空の歴史を構築している。当初、本作には二人の人物に焦点を当てた二つの時間軸があり、それらは主人公の回想録の出版を分岐点としていた。一つは、主人公が事故に遭った後、帰国して回想録を執筆する時間軸。もう一つは、その回想録が出版された後、主人公の父親が弾劾して裁判にかけられる時間軸である。この二つの時間軸は、それぞれ「ユダがイエスを裏切るまでの過程」と「イエスが裏切られた後に磔にかけられる出来事」に対応しており、物語の比重は両者が等しくなるように設計されていた。しかし、執筆を進める中で、筆者はこの構成が読者を混乱させ、物語の焦点やバランスを失わせる可能性があると考えた。また、本作が主に探求するテーマや伝えようとする価値は、主人公が異郷を流浪する過程やその心境の変化に集中しているため、最終的に主人公の父親の時間軸を削除する決断を下した。

### 第三節 筋書きを立てて執筆を開始

筆者はまず、作品の筋書きを立て、各章の主要なプロットを配置した。たとえば、第一章では主人公が事故に遭い、F 国に緊急着陸したことを描き、第二章では主人公が F 国に滞在する過程を描き、最終章では彼が帰国し、回想録を書く決意をする場面を描いた、などである。各章の主要なストーリーを決めた後、筆者は実際のストーリーの構想を始めた。筆者は事前に何の情報でも必ず伝えるべきかを考えてから、それに対応するストーリーを構想した。たとえば、第二章では、筆者は主人公の名声への渴望と、戦乱に対する彼の見解や心の葛藤を表すことで、最終章で国会議長に扇動されて簡単に寝返る展開を自然なものにするために、主人公とその警護官が寮の裏庭で対話を交わすシーンを書いた。本作のすべてのストーリーはこのようにして生まれた。ストーリーの構想は逆方向で行われた。筆者はあらかじめ結末を考え、その結末に至るための構造と要素を逆算して組み立て、それらの要素にふさわしいストーリーを構想した。

### 第四節 使用した技術

ここでは、筆者が本作の執筆において用いたいくつかの技術と、その理由を紹介する。

#### 1-1. 同義語と類義語

筆者は、同じ単語を繰り返し使うことを避けたり、あまりにも簡単な単語を使うことで文体の美しさが損なわれるのを避けたりするために、多くの「同義語」や「類義語」を用いた。筆者はインターネット上で、ある単語の同義語や類義語を検索し、たとえば「走る 同義語」や「綺麗 類義語」などと調べた。ネット辞書で得た語をもとに、さらに紙の辞書を引いて、その語が筆者の意図する意味に正確に合っているかを確認した。

#### 1-2. 漸層法

本作の多くのプロットや情報は、構成上の段階的な提示によって示された。たとえば、主人公の出自、彼が F 国で見聞きしたこと、そしてその心境の変化などがそれに当たる。この「タマネギの皮を剥くような」方法は、暗示を伴って一層と情報を明かしていく手法であり、筆者はそれによって読者を退屈させることなく、同時に不確実性や想像の余地を増すことができたと考えた。

#### 1-3. 信頼できない語り手

筆者は『The Rhetoric of Fiction』<sup>3</sup>で紹介された技法、すなわち「信頼できない語

<sup>3</sup> Wayne C. Booth, "The Rhetoric of Fiction" (1961)

り手」を用いた。その名の通り、信頼できない語り手とは、語り手が提示する情報が一部省略されていたり、疑義が残るものであったりすることを意味する。

たとえば最終章では、ヘンリーとデールが F 国での代理戦争について全く逆の意見を述べた。しかし物語全体を通じて、語り手は戦争の原因や戦況、またそれが A 国と B 国の国際的地位にどう影響するかについて一切語らなかつた。唯一登場した情報は、「F 国が A 国に隣接していること」と、「B 国が F 国にミサイルを設置して A 国を狙っていること」の二つだけであつた。これは筆者が意図的に行つたことであり、本作のストーリーに込めたひとつの性質である。それは「善悪や正誤が存在しないこと」を強調するためであつた。すべての登場人物の行動にはそれぞれの動機があり、客観的な善悪を追求することはできないということである。次に、同じく最終章において、主人公は深刻な内面的葛藤と自己懐疑に直面した。筆者は、葛藤や自己懐疑は人間の内面に普遍的に存在する性質であり、それはしばしば曖昧で不確実なものであると考えた。筆者はそのような曖昧さや不確かさを強調するために、最終章の語り手の多くの部分において、主人公の内心を「推測」の形でしか語れないようにした。

## 第三章 作品の分析

ここでは、筆者が「イスカリオテのユダ」の物語の構造について簡単に紹介する。その後、本作の世界観設定、登場人物、各章の要約、および結末の意味について順に説明する。

### 第一節 「イスカリオテのユダ」の構造

ユダは、イエスの最初の十二使徒の一人であり、金銭を好んだ<sup>4</sup>。彼は教会から三十枚の銀貨で買収された後、イエスを裏切ったことで<sup>5</sup>、イエスが磔にかけられることとなった。このことから、筆者は「A が何かを求めて B を裏切った」という基本的な構造を得た。より詳細な構造については、後続の各章の要約の中で補足する。

### 第二節 世界観設定

本作は架空世界を舞台としており、冷戦期におけるアメリカとソ連が西暦 1979 年から 1992 年にかけて中米エルサルバドルで行った代理戦争をモデルに構築した。作中の A 国はアメリカで、「あの大战（現実世界では第二次世界大戦）」の終結後に経済不況や政府の分裂など多くの問題に直面し、民心が離れ、士気が低下した。それが B 国（ソ連）との間で F 国（エルサルバドル）において行われた代理戦争に影響を及ぼした。

### 第三節 登場人物

#### 3-1. ユージン・S・リプリー

主人公。ユダを原型とした。幼少期に戦争を経験し、成長してからは常に不安と迷いに苛まれた。本作では、名声を得るために回想録を通じて、自分の養父が代理戦争で行った非人道的行為を暴露した。

#### 3-2. デール・F・リプリー

主人公の養父であり、A 国の大統領。イエスを原型とした。A 国国民の安全を守るため、あらゆる極端な手段を用いて、B 国との F 国での代理戦争に勝とうとした。

#### 3-3. ヘンリー・クレイ

A 国の国会議長。教会（ユダにイエスを裏切らせた存在）を原型とした。デールとは立場が対立しており、国内の経済と景気を守るため、B 国との代理戦争に反対した。ある宴会で、ユージンに著作を勧め、デールを裏切らせた。

#### 3-4. イーサン・リプリー&シャーロット・リプリー

デールのもう二人の養子であり、ユージンの法的な兄と姉にあたる。二人とも才能と名声を兼ね備えており、ユージンの嫉妬を買っていた。それがユージンが回想録を執筆してデールを裏切る動機の一つとなった。

---

<sup>4</sup> 新約聖書『ヨハネによる福音書』12：4-6

<sup>5</sup> 新約聖書『マタイによる福音書』26：14-16

## 第四節 各章の要約

### 4-1. 第一章

ユージンは飛行機事故に遭って F 国へと緊急着陸した。ちょうど現地では内戦が起きていたため、すぐに出国できず、大使館に留まらざるを得なかった。

本作は倒叙で書かれており、第一章の時点ですでに物語の結末が起きた後の出来事となっている。また、本作の重要な出来事（銃殺、回想録の出版）もこの章の冒頭ですでに暗示された。主人公は発表会の場面を通して、すべての事件の始まりを思い出した。

### 4-2. 第二章

ユージンは大使館へ向かう途中、自身の幼少期を回想した。F 国での滞在中、彼は暴動、毒ガス攻撃、戒厳令など、戦争のさまざまな模様を目の当たりにし、帰国の一か月前には市民に対する銃殺を目撃した。これらの体験は彼の内面に変化をもたらし、ある意味で後に回想録を書くきっかけの一つとなった。

本作の主要な出来事の多くはこの章に集中している。章の冒頭では母親のことからユージンの幼少期が語られ、また戦争が個人や家族に与える深刻な影響を通じて、本作のテーマの一つである「反戦」が描かれた。この章では、少年兵、毒ガス攻撃、テロ、飢餓、市民の銃殺などの描写が反戦のテーマを強く反映していた。戦場そのものを描かずとも、これらの出来事を通じて戦争の残酷さを浮き彫りにしたことは、読者の心をより深く揺さぶったと筆者は考えた。この章では、ユージンに関する多くの情報も明かされた。たとえば彼が執筆を始めた動機や、幼少期の体験が性格に及ぼした影響などである。ユージンは幼少期の経験から、常に不安と迷いに苛まれ、名声を強く求めるようになった。それは、彼は名声こそが自分の人生を安定させる唯一の手段だと信じているからだ。この点は本作のもう一つのテーマである「人間の食欲」にもつながる。ユージンは大統領の養子という立場にあり、大統領退任後も安穏とした生活が保障されていたが、彼自身はそれを足りないと感じた。この感情もまた、戦争が個人に与える影響の表れであり、戦争を経験した者はたとえ後に富や地位を得ても、心の中に残る傷からは逃れられないという現実を示していた。この章のクライマックスは、ユージンが大使館内の兵士二人に頼み、街へ出る許可を得た場面にあった。そして、彼は女性や子どもに対する銃殺を目の当たりにした。ここでは、ユージンの戦争に対する無関心が明らかになった。なぜなら彼が街に出た理由は、戦争への関心ではなく、大使館内での退屈さを紛らわすためだったからである。この描写は『ヨハネによる福音書』<sup>6</sup>を呼応した。ユダは貧しい者たちへの寄付を提案したが、それは本当に貧者を思っているのではなく、彼が盗人であり金銭を好んでいたからである。同時に、この銃殺の目撃は物語の伏線にもなっており、最終章で彼がこの出来事を思い出し、戦争を語ることでデールを裏切る決意をした点にもつながっていく。これは、彼が本当は戦争を憂いていたわけではなく、戦争を名声を得る手段として利用しようとしていたことを示していた。

### 4-3. 最終章

ユージンは帰国後の宴会で国会議長のヘンリーと知り合い、彼から F 国での見聞を書き記すことで、デールの極端な行為を暴くよう唆された。ユージンは迷いに陥ったが、その中に自身が名声を得られる可能性を見出した。彼は書きながらもためらい続け、そして A 国の建国記念の日の宴会において、自分の兄と姉が人々からもてはやされ、自分だけが隅に立ち尽くしている姿を見たとき、ついに回想録を出版する決意を固めた。

---

<sup>6</sup> 新約聖書『ヨハネによる福音書』12：5-6

ユージンはこの章で最も激しい内面的葛藤を経験した。彼はデールの苦しみを理解していたが、同時に軽んじられているとも感じた。デールを裏切ることにはためらいを覚えたが、ヘンリーの言葉を見捨てることもできなかった。なぜ自分が回想録を書くのかわからなかったが、それによって名声を得られる可能性をどうしても拒めなかった。この章には聖書の章句との呼応が多く含まれていた。たとえば：ヘンリーが晩餐会でユージンにデールの行動を暴くよう唆し、ユージンにそれが名声へと繋がる可能性を自覚させた場面は、『マタイによる福音書』<sup>7</sup>に呼応していた。長老と祭司たちがユダを銀貨 30 枚で買収した場面である。ユージンが建国記念の日の晩餐会で、兄と姉が人々に称賛されるのを目にし、怒りを覚えて回想録を出版することを決意した場面は、『ヨハネによる福音書』<sup>8</sup>に呼応していた。そこでは、悪魔がユダの心に入り込んだと書かれている。デールが晩餐中に述べた演説は、ユージンが自分を裏切ること直接的には指摘しなかったものの、『マタイによる福音書』<sup>9</sup>と呼応しているものであった。イエスが食卓で弟子たちに「この中のひとりが私を裏切る」と言い、その裏切者がユダであることを示唆する場面である。ここは本章の重要な段落となっている。イエスはユダが自分を裏切ることを明確に告げたが、それを止めようとはしなかった。このことにより、ユダが自由意志によってイエスを裏切ったという前提が築かれている。彼は唆され、告発されてはいたが、強制も妨害もされなかったのである。同様に、デールもユージンが自分を裏切るかもしれないと知っていたが、それを止めようとはしなかった。ユージンは完全なる自由意志を持っていたのであった。

## 第五節 結末の意味

『マタイによる福音書』<sup>10</sup>において、ユダは最後にイエスを売ったことを後悔し、首を吊って自殺した。これに基づき、私たちはある構造を導き出すことができた。すなわち、Aが何かのためにBを裏切り、しかし最終的にAはそのことで何かを失った、という構造である。ユダの物語では、ユダは命を失った。本作においては、筆者はユージンが何を失ったかを明記しなかった。それはオープンエンディングであり、読者自身の思索と想像に委ねられているからだ。しかし、新刊発表会でユージンが記者たちのフラッシュを浴びたとき、彼はあの銃殺の場面を思い出し、何か似ていると感じた。この場面は次のことを暗示していた。彼は回想録によって有名になり、新刊発表会には記者が詰めかけ、フラッシュが飛び交った。そのフラッシュは、銃殺の際の銃口の光に対応しており、それは実質的にユージンに対する銃殺であった。あの夜、子供や女性たちは銃殺によって命を失った。そして彼もまた、デールを売って名声を得たことによって、何かを失う運命にあった。だからこそ、彼は「何か似ている」と感じたのだった。

---

<sup>7</sup> 新約聖書『マタイによる福音書』26：14-16

<sup>8</sup> 新約聖書『ヨハネによる福音書』13：2

<sup>9</sup> 新約聖書『マタイによる福音書』26：20-23

<sup>10</sup> 新約聖書『マタイによる福音書』27：5